

7 水温躍層破壊実験

ニュージーランド遊漁研究所では小さな湖水の中層にできた水温躍層を特殊水中砲でうつつを明け、上層と深層の水を交換さすのに成功したと報ぜられた。この水中砲は圧搾空気を用いた装置で、1日500万ガロンの水を底から水面まで動かせるという。成層が湖水の生産を限定する因子の一つで、魚類は夏季暖かい表層水の酸素の溶在するところで生活するが、冷たい栄養塩の豊富な底層水は時に酸素欠乏で魚類を殺すようなことがある。27エーカーの面積をもつ一潮水で5台中砲を施設して14日間砲撃テストをした結果、顕著な水温躍層を消滅さすのに成功したということである。海の場合は水温のほか塩分の成層が加わつてきた密度躍層が破壊をより困難にすると思われる。ともかく、人工的に上下層の水を混ぜせしめる一つ的手段として今後研究に値するであろう。

(宇田 道隆)

8 鯨資源の転機と行末

出所：Intern. Mar. Sc. III. 3のFAO報告及びJ. L. Mc Hugh(米国水産庁)の「鯨資源の過去、現在、将来」による

1965年6月28日～7月2日英国ロンドンで第17次国際捕鯨会議(International Whaling Commission, 17th Annual Meeting)が開かれた。その前に6月21日からは北太平洋作業グループ会議が開かれた。これらの会議において乱獲による鯨資源の減少をとめるための規制行為に対して重要な決定がなされ、脅威を受けておる鯨種を保護し、将来減少したストックを最大生産を維持できる数量にまで回復できるようにしようということが確認された。南極洋では乱獲の影響が最も現われているが、合意の基礎は前月ロンドンで開かれた緊急特別会議の勧告にある。その会合でFAOは科学者グループによるヒゲ鯨資源の現状、査定結果を提示し、捕鯨委員会は1965～66年漁期の漁獲量を思い切つて制限することに一致した。しかし不幸にも割合レベルは未だ余りにも高過ぎ、現在の維持生産量の倍位になつている。それをさらに1966～67年漁期、1967～68年漁期に減らし、その後は捕獲を維持生産量以下におとすことになつている。将来の捕獲は資源の状態の最良利用可能を目的とした科学的の査定に基くことになつており、捕鯨委員会はFAOと合意の上でこれら査定を共同の基盤の上で引続いて定期的に行なうことにした。南極洋捕鯨割当は過去には洋上捕鯨にのみ適用された。しかし17次会議では基地捕鯨が終始問題になりこの国際的、国内的割当量と、捕鯨の国際監察実施が論ぜられた。さらに北太平洋および熱帯、亜熱帯海の他の鯨資源の合理的管理に向うことになり、北太平洋のザトウクジラ、シロナガスクジラの捕獲は全面的に禁止し、マッコウクジラについては $40^{\circ}N \sim 40^{\circ}S$ 緯度の洋上捕獲を禁止することが提案されたが、この禁漁は未だ各国の充分な支持を得ていない。(捕鯨委員会メンバーのどれかでも90日以内にどの勧告に対しても反対を表明でき、そのときは同勧告はその国に適用されないことになる。勧告は捕鯨委員